

名誉顧問のコモンセンス

二律背反 表裏論 11

相撲必勝法 三つつ

自分の相撲をとるか、とらないか？



後出しジャンケン いま(11月18日)、大相撲の九州場所が開かれています。入場券はすべて売り切れで、連日、「満員御礼」の垂れ幕が下がって大盛況です。新横綱大の里の人気もありますが、各力士の奮闘が激しく、土俵上では、毎日、熱戦が繰り広げられているのが最大の魅力です。特に、平幕力士が突然、番狂わせで現れて大活躍をしています。中でも目を引くのがウクライナ出身の新小結安青錦です。9日に東京都内の日本外国特派員協会で記者会見し「こんなに早く、三役に上がれると思っていなかった。横綱を目指してやっていく」と抱負を述べました。年6場所制で最速となる初土俵から所要12場所(付け出しを除く)の新三役の秋場所では11勝を挙げて次の大関候補に名乗り出たのです。私は、今回の九州場所の優勝はこの安青錦だと確信しましたーというホームページを書きたかったのですが、いまはもう11月30日で、すでに安青錦は優勝しました。後出しジャンケンで、まったく説得力はありません。でも、確信した次第を書きます。

相撲の必勝法は三つある

1 必勝法その一：自分の相撲をとる。

下から相撲 まず、安青錦が優勝したのは、自分の相撲をとったからです。初日から四連勝しました。この連勝は、いずれも自分の相撲をとったからです。まず、立ち会いで頭を下げて相手の身体をかち上げて前揮(まえみづ)をとりにいきます。頭は相手の胸に当てて、そのままぐいぐい押していく、上体が浮いたままの相手を押し出します。これが、安青錦の「自分の相撲」で、「必勝法」です。

2 必勝法その二:相手に「自分の相撲」をとらせない。

天敵の注文相撲 もう一つの「相撲に勝つための必勝法その2」は、相手に「自分の相撲」をとらせないことです。これは「自分の相撲をとる」に対する「二律背反」ならぬ、「二律同伴」です。安青錦も4連勝したのはいいのですが、連勝すると必ずいつかは負けます。相手が、こちらの必勝法を学んで対策を練るからです。五日目に安青錦は若隆景に負けました。若隆景は、安青錦の戦法を研究して仕切で咄嗟に左に飛んだのです。安青錦はいつものように下を向いて飛び出し、それを待っていた若隆景のはたき込みに遇い敗れました。一秒もかからぬ若隆景の「注文相撲」でした。六日目の相手は宇良(うら)です。今度は同じ手に乗らず、寄り切りで倒しました。十一日目は義ノ富士に突き出して敗れて二敗。十三日目は横綱大の里に寄り切りで敗れて三敗になりましたが、千秋楽の大関琴桜戦ではお得意の「内無双」(うちむそう)で勝ちました。これも、いつものように前権を取りに行き、今度は上手を取ったその手で相手の太もも(内股)を内側の下から払い上げて勝ちました。元々、レスリングの心得もある安青錦ですから、咄嗟に相手の足を掬(すく)うのも自分の「下から相撲」のアレンジです。相手に戦法を学ばれたら、自分の相撲を少し変える。自由自在です。



3 必勝法その三:強い「志」(こころざし)を持つ。

祖国を思う志 安青錦のこの快進撃を可能にしているのは、彼のウクライナ人としての「志」です。論語に、「子曰(いわく)、三軍も帥(すい)を奪う可きなり。匹夫(ひっぷ)も志(こころざし)を奪う可からざるなり」というのがあります。意味は、「大軍に守られている総大将でも討ち取ることは出来るが、たとえどんなに身分の低い男でも、意思が堅ければその志を変えさせることは出来ない」です。いま、アメリカの大リーグの野球では、日本人の大谷翔平選手が大活躍をして大評判です。安青錦も、大谷翔平選手も、むろん匹夫ではありませんが、「祖国の人々を勇気づけるために相撲に勝とう!」「祖国の発展のために野球に勝とう!」という強い「志」をもって試合に出ています。この二人の快進撃は、この強い志によって可能になったのです。そして、その結果、それぞれの国の人たちはこぞって、勇気を奮い起こし、元気になり、祖国の名誉を守り、お互いを信じ尊敬し合うようになりました。これを、「安青錦効果」「オオタニ効果」といいます。

[2025/12/04 都築正道]